

【原著論文】女子大学生における友人関係の特徴 (1)

—母子関係との比較から—

牛 田 景 子

金城学院大学

Female University Students' Friendship and Mother — Child Relationships: A Comparison

Keiko Ushida

Kinjo Gakuin University

The present study investigated friendship between female university students when compared with mother-child relationships. A total of 245 university students completed a questionnaire survey that comprised questions regarding their sense of internal working model scales, authenticity, and emotional experiences. The questionnaire measured attachment styles concerning best friends and mothers.

The following two factors relating to adult female friendship were identified: “trust of others” and “self-worth,” while the two factors relating to mother-child relationships were “a sense of affinity” and “sense of acceptance”. Based on these results, the study concluded that adult female friendships and mother-child relationships involve different aspects. The two types of relationships vary in their sense of authenticity and emotional experiences. It was also suggested that adult female friendships were more positive relationships than the mother-child relationships. In other words, there is a possibility that adult female friendships may develop to become more secure relationships, unlike mother-child relationships.

Key words: Internal working model (内的作業モデル), friendship (友人関係), mother-child relationships (母子関係)

要 約

本研究では、女子大学生の友人関係の特徴に関して、母子関係との比較から調査を行った。女子大学生245名を対象に内的作業モデル尺度、本来感、感情体験に関する質問紙調査を行い、最も親しい友人と母親に関する関係性を評価した。

分析の結果、最も親しい友人の関係性では「他者への信頼」「自己価値」の2因子が、母親との関係性では「親近感」「被受容感」の2因子が抽出された。結果より、最も親しい友人と母親に対するそれぞれの関係性は、異なる視点から捉えられていること、それぞれの関係性において体験することや感じる気持ちの程度の違いが明らかとなった。そして、最も親しい友人との関係においては、母子関係と比べてよりポジティブに関係性を捉えていることが示された。つまり、友人関係は母子関係とは異なる、より確かな関係へと発展する可能性があるといえる。

I. 問題と目的

青年期について捉えるとき、特に重要な対人関係として“友人関係”に着目する必要があると考えられる。榎本（1999）は依存的で親中心であったそれまでの時期と異なり、青年期は親から独立して自己の形成や自律性を確立する時期としている。そして青年期において、第二次性徴などに伴う急激な心身の変化や親から独立することは、不安や恐れを伴うために、青年は悩みや考えを語り合う同世代の友人が必要になるとしている。つまり、友人という存在は、青年期においてそれまで以上に重要な存在となると考えられる。

これまでの研究において、家族・母子関係と友人関係では、サポートにおいて求める・得られるものが異なり、さらに、その友人関係から得られるものは母子関係で幼い時期に得られなかったものを補う側面があるという、大きく異なる特徴が存在すると示唆されている。光元・岡本（2010）は、重要な他者（母親、父親、親友、恋人）に対する心理的居場所感と、心理社会的発達課題の達成の関連について検討している。その結果、母親に対する心理的居場所感の高さに関わらず、親友に対する心理的居場所感が高いほど、恋人に対する心理的居場所感は高くなることを明らかにしている。このことは、たとえ幼児期以降の母親との関係性が悪く、母親に対する心理的居場所感が低くとも、親友が心理的居場所となるような関係性を持つことができれば、そこから恋人へと心理的居場所感が広がっていく可能性を意味すると指摘している。また、発達早期における母親との関係性が悪く基本的信頼感や愛着をしっかりと形成できていなくとも、親友との関係性次第で「信頼感」や「親密性」の発達レベルが高まる可能性がある」と指摘している。さらに面接調査により、発達に伴ってどのような心理的居場所を持ってきたかについて、母親に対する心理的居場所感を軸に質的に検討しており、母親に対する心理的居場所感の高低による発達の變遷の比較を行なっている。その結果から、幼児期から思春期まで継続して感じる〈見守られ感〉を青年期において、友人や恋人との間で充足できることが示唆され、発達早期から達

成できずにいた発達課題に、再度取り組むことができるようになる可能性が考えられる、としている。すなわち、母子関係において得られなかったものが発達の中で友人との出会いによって充足することができる、つまり、友人関係において母子関係で得られるものを“補う”ことができるのである。

また、青年期における対人関係を捉えるにあたり、性差についても注目する必要があると考えられるが、光元・岡本（2010）は、母親と親友に対する心理的居場所感では、男性よりも女性の方が有意に高いことを明らかにしており、女性同士では心理的居場所感が高くなると考えられている。よって、青年期の友人関係を捉える際には、女性を対象とすることにより、より立体的な関係性を捉えることができると考えられる。

青年期の友人関係の研究において、愛着を取り上げているものが多くある。愛着とは、人間と情緒的に結びつきたいという要求を持つ状態であり、愛着要求は人間のもつ本質的な要求の一つで、人間が生涯にわたって保持し続ける要求である。金政（2007）は、青年期の愛着スタイルが友人関係における適応性とどのように関連しているかを検討している。そして、青年期の愛着スタイルが、自己が考える個人内の適応性のみならず、友人関係での相手が捉える個人間の適応性にも関連しており、さらにそれらは互いにある程度対応している。つまり、愛着は青年期の友人関係を捉える上で、重要な視点であると考えられる。

では、友人関係という関係性は個人に対して、どのような影響を与えるのだろうか。伊藤・小玉（2005）は、本来感を「自分自身に感じる自分の中核的な本当らしさの感覚の程度」と定義している。そして、伊藤・小玉（2006）は、大学生の主体的な自己形成に影響する内的要因として本来感、自己価値の随伴性、自尊感情を検討している。その結果から、自分らしくある感覚は、自分の責任により選択していくこと、自己の新しい可能性へと踏み出そうとする意識、現状の自分を改善していこうとする意識にとって、重要な内的資源であることを示唆している。また、中田（2006, 2007）は、感情体験尺度を作成し、豊かな感情体験のより「特性的」側面を

捉えている。そして、信頼性の検討において、Cronbachの α 係数と再検査法を用い、1回目と2回目の調査で高い相関が得られたことから、尺度は「状態」を捉えるものではなく、人格の比較的安定した特性的側面にアプローチしていることを示唆している。つまり、感情体験の程度はその場のみの感情体験の状態ではなく、それまでに形成されてきた人格、性格特性からの特徴であると捉えることができるのである。この“本来感”と“感情体験”という視点に着目することにより、大学生における友人関係という関係性からの影響や可能性をより具体的に捉えることができると考えられる。

以上より、本研究では女子大学生に着目し、青年期において特に重要とされる友人との関係性について検討する。そこで、愛着関係における内的作業モデルから、最も親しい友人と母親のそれぞれに対する関係性を捉えることにより、より具体的・立体的に青年期における友人との関係性のあり方を捉える。さらに、関係性による体験や感じる気持ちという側面に着目し、“本来感”“感情体験”を用いる。

II. 方法

A県内の大学生245名（すべて女性：平均年齢19.3歳）、2012年7月に実施した。

1. 質問紙構成

①内的作業モデル尺度

酒井（2001）が作成した、内的作業モデル尺度を使用し、最も親しい友人と母親との関係性について捉える。これまで述べられてきた内的作業モデル理論をもとに解釈するが、本研究では、関係性を内的作業モデルから理解する尺度として捉え、以降は“関係性尺度”と名前を置き換える。全9項目、5件法で回答を求める。

②本来感尺度

伊藤・児玉（2005）の本来感尺度を用いて、個人が自分らしくあると感じている全般的な感覚を測定する。全7項目、5件法で回答を求める。

③感情体験尺度

中田（2006）の感情体験尺度を用い、「豊かな感情体験」の程度を捉える。全17項目、4件法で回答を求める。

④最も親しい友人と母親の違い尺度

最も親しい友人と母親の違いを具体的に明らかにする尺度を作成するため、大学院生を対象として、アンケート及びインタビューを実施する。上記の項目の含まれた質問紙に、“最も親しい友人と母親の違い”を尋ねる項目を加えたものでアンケートを行い、また調査対象者の一部にインタビューを行い、最も親しい友人と母親の違いについて具体的に尋ねる。その結果から“最も親しい友人と母親の違い尺度”を作成した。

最も親しい友人と母親の違い尺度は、最も親しい友人・母親のそれぞれに対して、“恋愛関係”と“自分の気持ちや価値観”の二つの側面を通して、自分自身とどのような関係性をもっているのかについて尋ねる。項目は、最も親しい友人・母親のそれぞれに対し、「私は最も親しい友人（母親）に、私の恋愛関係について話すことができる」「私の最も親しい友人（母親）は、私の恋愛関係について理解を示してくれると思う」「私は最も親しい友人（母親）に、自分の気持ちや価値観について安心して話すことができない（逆転項目）」などの全12項目、5件法で回答を求める。“恋愛関係”と“自分の気持ちや価値観”で、項目の順番を適宜入れ替え、また対象（最も親しい友人と母親）によっても、項目の順番を適宜入れ替える。

III. 結果

1. 質問紙の因子構造

a. 関係性尺度

最も親しい友人と母親のそれぞれに対する関係性尺度について、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を実施した。最も親しい友人については、固有値の減衰と解釈の可能性から2因子を抽出した。因子負荷量.40以上の項目を採用し、いずれの因子にも高い値を示した項目は除外された。この2因子により59.3%を説明できる。第一因子は、「私は最も親しい友人に心を許して話をできる」「私は最も親しい友人を信頼できる」などの項目に高い因子負荷量を示しており、他者への信頼に関する項目群がまとまったと判断し、＜他者への信頼＞因子と命名した。第二因子は「私は最も親しい友人の役に立って

いるとは思えない（逆転項目）」「私は最も親しい友人と付き合うだけの価値があると思う」などの項目に高い因子負荷量を示しており、自己価値に関する項目群がまとまったと判断し、＜自己価値＞因子と命名した。各因子の信頼性について確認するため因子ごとに α 係数を算出したところ、＜他者への信頼＞因子（ $\alpha = .83$ ）と＜自己価値＞因子（ $\alpha = .76$ ）は十分な信頼性があると判断した（Table 1）。

Table1 最も親しい友人に対する関係性尺度の因子分析結果

	I	II	共通性
＜他者への信頼＞ $\alpha = .83$			
私は最も親しい友人に心を許して話をできる	.87	-.05	.71
私は最も親しい友人を信頼できる	.78	-.01	.60
私は最も親しい友人に悩みごとを打ち明けられる	.79	.04	.54
＜自己価値＞ $\alpha = .76$			
私は最も親しい友人の役に立っているとは思えない（逆転項目）	.20	-.88	.61
私は最も親しい友人と付き合うだけの価値があると思う	.00	.61	.34
私は最も親しい友人と付き合うのが下手だと思う（逆転項目）	-.11	-.53	.36
私は最も親しい友人が元気のない時、支えになってあげられる	.28	.49	.45
私は嫌なことがあったとき、最も親しい友人と一緒に騒いで気晴らししたいと思う	.11	.45	.27
＜残余項目＞			
私は最も親しい友人に受け入れてもらえると思う	.32	.41	.05
因子間相関	.60		

Table2 母親に対する関係性尺度の因子分析結果

	I	II	共通性
＜親近感＞ $\alpha = .88$			
私は母親に悩みごとを打ち明けられる	.98	-.15	.76
私は母親に心を許して話ができる	.84	.07	.79
私は嫌なことがあったとき、母親と一緒に騒いで気晴らししたいと思う	.66	.00	.45
私は母親を信頼できる	.63	.24	.67
＜被受容感＞ $\alpha = .83$			
私は母親と付き合うだけの価値があると思う	-.12	.89	.64
私は母親に受け入れてもらえると思う	.13	.72	.67
私は、母親の役に立っているとは思えない（逆転項目）	.04	-.62	.36
私は母親が元気のない時、支えになってあげられる	.29	.43	.45
＜残余項目＞			
私は母親と付き合うのが下手だと思う（逆転項目）	-.37	-.48	.63
因子間相関	.74		

た。第二因子は「私は母親と付き合うだけの価値があると思う」「私は母親に受け入れてもらえると思う」などの項目に高い因子負荷量を示しており、被受容感に関する項目群がまとまったと判断し、＜被受容感＞因子と命名した。各因子の信頼性について確認するため、因子ごとに α 係数を算出したところ、＜親近感＞因子（ $\alpha = .88$ ）と＜被受容感＞因子（ α

母親については、固有値の減衰と解釈の可能性から2因子を抽出した。因子負荷量.40以上の項目を採用し、いずれの因子にも高い値を示した項目は除外された。この2因子により68.7%を説明できる。第一因子は「私は母親に悩みごとを打ち明けられる」「私は母親に心を許して話ができる」などの項目に高い因子負荷量を示しており、親近感に関する項目群がまとまったと判断し、＜親近感＞因子と命名し

＝.83）は十分な信頼性があると判断した（Table2）。これらの結果から、最も親しい友人と母親に対する関係性尺度において、因子構造に違いがあることが明らかになった。

b. 本来感尺度

本来感尺度について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を実施した。固有値の減衰と解釈の

可能性から1因子を抽出した。因子負荷量.30以上の項目を採用した。この1因子により49.9%を説明できる。信頼性について確認するため α 係数を算出したところ、{本来感}尺度($\alpha = .83$)は十分な信頼性があると判断した。

c. 感情体験尺度

感情体験尺度について因子分析(主因子法, プロマックス回転)を実施した。固有値の減衰と解釈の可能性から2因子を抽出した。因子負荷量.30以上の項目を採用し, 2因子にまたがって高い値を示した項目は除外された。この2因子により39.17%を説明できる。この結果は中田(2006)とは異なる因子構造であるため, 因子名を命名した。第一因子は, 「自分が本当はどんな気持ちでいるか理解した上で, 何をしたいのか考えようとする」「自分のこころの内面はとても深く豊かだと感じられる」などの項目に高い因子負荷量を示しており, 自分の感情を積極的に感じ, 受容的に体験していることに関する項目群がまとまったとして「感情への積極性」因子と命

名した。第二因子は「嫌な出来事があると, 自分でもわけのわからない気持ちにおそわれることがある」「人に自分の気持ちをうまく伝えられない」などの項目に高い因子負荷量を示しており, 自分の感情を意識する・気付くことに関する項目群がまとまったと判断した。そして, 因子負荷量は正であるが, 感情体験尺度という尺度としての方向性から, 「感情への気付き」因子と命名し, 以降の分析においては逆転項目として扱う。各因子の信頼性について確認するため因子ごとに α 係数を算出したところ「感情への気付き」因子($\alpha = .68$)については妥当性にやや疑問が残るが, 今回はそのまま因子として分析を進めることとした。「感情への積極性」因子($\alpha = .82$)については十分な信頼性があると判断した。これらをまとめたものをTable3に示す。また, 項目に付けられている記号は先行研究の中田(2006)の因子別につけており, 「感情に対する統制可能感(○)」「感情に対する尊重性(△)」「感情の優位性(□)」としている。

Table3 感情体験尺度における因子分析

	I	II	共通性
[感情への積極性] $\alpha = .82$			
(△) 自分が本当はどんな気持ちでいるか理解した上で, 何をしたいのか考えようとする	.67	.08	.41
(△) ほんとに辛く悲しいときにはその気持ちの重みを十分に感じられる	.67	.13	.39
(△) 自分のこころの内面はとても深く豊かだと感じられる	.64	.09	.37
(△) その時々自分の気持ちを大切にしている	.63	.06	.37
(△) 自分の気持ちを感じながら, それについて考えたり行動を決めたりする	.61	.05	.35
(○) 私は自分の本当の気持ちにすぐに近づくことができる	.53	-.24	.45
(○) 自分の欠点やコンプレックスと付き合っている	.40	-.21	.28
(○) 自分が感じていることをいろいろな言葉で言い表せるような気がする	.40	-.20	.32
(○) 自分が持っている悩みと落ち着いた気持ちで向き合うことができる	.39	-.27	.32
(□) うれしいときには“うれしいなあ”とめいっぱい喜びをかみしめる	.38	.21	.25
[感情への気付き] $\alpha = .68$			
(○) 嫌な出来事があると, 自分でもわけのわからない気持ちにおそわれることがある※	.19	.65	.35
(□) 喜んだり悲しんだりしていてもそれが本心からのものではないように感じることもある※	.09	.64	.37
(○) 人に自分の気持ちをうまく伝えられない※	-.07	.58	.37
(○) 自分の感じていることが良くわからないことが多い※	-.14	.54	.38
<残余項目>			
(△) ふとした瞬間に自分は本当はこう感じているんだなあと思うことがある	.49	.32	.21
(△) 自分の内面の気持ちにはあまり触れようと思わない※	-.23	.21	.41
(□) 人と話すときに, 自分がどんな気持ちかを話すよりも一般論を話していることが多い※	-.08	.30	.30
因子間相関	-.44		

※尺度の方向性から逆転項目とする

2. 関係性尺度における比較

各尺度においてその方向性を鑑み、逆転項目は5点を1点に、4点を2点に、3点はそのままで換算した。本来感尺度のみ、逆転項目は3点を0点に、2点は1点に換算した。

a. 最も親しい友人と母親に対する関係性尺度の因子による共通項目の比較

最も親しい友人の〈他者への信頼〉と母親の〈親近感〉の共通項目、最も親しい友人の〈自己価値〉と母親の〈被受容感〉における共通項目の平均値について対応のある *t* 検定を実施した。その結果、最も親しい友人の〈他者への信頼〉と母親の〈親近感〉における共通項目 ($t(244) = 7.25, p < .001$)、最も親しい友人の〈自己価値〉と母親の〈被受容感〉における共通項目 ($t(244) = 6.03, p < .001$) いずれにおいても有意差が見られた (Table4)。どちらの比較においても、母親よりも最も親しい友人の方が高くなることが示された。

Table4 対象別に見た関係性尺度での因子による各共通項目の平均値と標準偏差

	最も親しい友人	母親	<i>t</i> 値
最も親しい友人の〈他者への信頼〉と母親の〈親近感〉の共通項目	4.43 (0.63)	3.92 (1.02)	7.25***
最も親しい友人の〈自己価値〉と母親の〈被受容感〉の共通項目	3.79 (0.68)	3.50 (0.84)	6.03***

※ () 内は標準偏差

*** $p < .001$

Table5 関係性と本来感と関係体験に関する相関

	最も親しい友人の 〈他者への信頼〉	最も親しい友人の 〈自己価値〉	母親の 〈親近感〉	母親の 〈被受容感〉	{本来感}	[感情への 積極性]
最も親しい友人の 〈自己価値〉	0.51**					
母親の〈親近感〉	0.17	0.21**				
母親の〈被受容感〉	0.32**	0.49**	0.66**			
{本来感}	0.24**	0.41**	0.24**	0.31**		
[感情への積極性]	0.33**	0.52**	0.34**	0.44**	0.57**	
[感情への気付き]	0.17	0.28**	0.30**	0.35**	0.55**	0.39**

** $p < .01$

IV. 考察

1. 各尺度の因子構造について

a. 関係性尺度

最も親しい友人と、母親のそれぞれの対象での関係性尺度において、因子分析を行なったところ、最も親しい友人と母親のそれぞれで、異なる因子構造がみられ、因子に含まれる項目も異なる結果となっ

3. 関係性と本来感と感情体験に関する相関の比較

各尺度における〈他者への信頼〉・〈自己価値〉・〈親近感〉・〈被受容感〉・{本来感}・[感情への積極性]・[感情への気付き]に関する相関係数を算出した。最も親しい友人の〈他者への信頼〉は、最も親しい友人の〈自己価値〉と、また、母親の〈親近感〉・[感情への気付き]を除いた項目において相関が見られた。最も親しい友人の〈自己価値〉は、母親の〈被受容感〉・〈本来感〉・[感情への積極性]の項目において相関が見られ、〈母親の親近感〉・[感情への気付き]の項目間で相関が見られた。母親の〈親近感〉は、母親の〈被受容感〉と、および {本来感}・[感情への積極性]・[感情への気付き]において相関が見られた。母親の〈被受容感〉は、全ての項目において相関が見られた。{本来感} は、[感情への積極性] [感情への気付き]と相関が見られた。[感情への積極性] は、[感情への気付き]との間で相関が見られた (Table5)。

た。最も親しい友人においては、〈他者への信頼〉因子と〈自己価値〉因子、母親においては〈親近感〉因子と〈被受容感〉因子と命名した。これらのことから、特に最も親しい友人と母親との、それぞれの関係を捉える“視点”の違いが明らかとなった。

まず、最も親しい友人について考察する。最も親しい友人との関係は、関係を築くベースが全くない状態、つまり“出会い”が関係の始まりであり、自

分と他者と共に関係を築いていくという特徴がある。まず関係を築いていく時には、第一にお互いを知り、その上で自分は他者にとって支えになれる、役に立てるといふ自己価値が見いだされていくと思われる。自己価値を見出す上では、何かしらの他者からのフィードバックを受け、友人との関係においては互惠性が成立し、「頼りにできる」といふ体験が伴うのではないだろうか。その結果、自分の存在意義を再確認し、話を打ち明けられる、心を許して話を出来ることに繋がると考えられる。つまり、＜自己価値＞が見いだされることにより、＜他者への信頼＞が深まり、心を許して話すことができ、信頼できる関係が築かれていくのである。そして、今回の因子分析結果で第一因子として＜他者への信頼＞が挙げられたということからは、＜他者への信頼＞が最も親しい友人との関係性の中で一番重要視されていることが考えられ、＜自己価値＞を見出すという段階を踏まえて築かれるからこそ、関係性の中で大きな意味を持つのではないだろうか。また、今回の対象が友人の中で最も親しい友人であり、他の友人よりも深い関係であることから、＜自己価値＞ではなく、「信頼関係」が第一に重要視されたとも考えられ、最も親しい友人というある程度関係を築いている対象であるために、見いだされた結果であると思われる。光元・岡本（2010）が、親友との関係性次第で「信頼感」や「親密性」の発達レベルが高まる可能性があるとして指摘しているが、親友と関係を築く上で「信頼感」が形成され、親友関係において信頼関係を築いていくことによって、「信頼感」を高めることができるのではないだろうか。関係性尺度から、最も親しい友人とのつながりを捉える具体的な視点が明らかになったことにより、友人関係における特徴が立体的に示唆されたといえる。

それに対し、母親との関係は、生まれたときから長年の月日とともに築かれてきたものである。また、母親は自分を養い育てる存在であり、友人関係で捉えられる仲の良い“近さ”とは異なる、《親近感》が存在すると考えられる。この《親近感》とは、何か大きな決断や負担（受験や事故など）を強いられた場合に、頼ることのできる存在に対する“近さ”である。第一因子に《親近感》があげられ、重要な

視点としてあげられたということからは、友人関係とは異なる「親子」といふ血縁関係からの関係性の特徴が表れていると思われる。そして、《親近感》とともに見出された《被受容感》については、最も親しい友人では残余項目となった“受け入れてもらえると思う”という項目が含まれた点から、血縁関係における無条件の“受容感”が大きな特徴としてあげられると考えられる。しかし、母親との関係においては、母親に自分のすべてを受容されるというだけではなく、行動に対して指摘されたり、怒られたりするなどのネガティブな体験も、受け入れられている体験とともに存在すると思われる。そのために、“受容感”だけでは関係性は捉えられず、《被受容感》という点が重要とされることが考えられる。母親と子という、“親子”関係であるために、友人とは異なる《親近感》《被受容感》という視点が見出されたのではないだろうか。

b. 感情体験尺度について

感情体験尺度において因子分析を行ったところ、中田（2006）での感情体験尺度の因子分析結果とは、大きく異なる因子構造が示された。中田（2006）の感情体験尺度の因子分析結果からは、「感情に対する統制可能感（○）」「感情に対する尊重性（△）」「感情の優位性（□）」の3因子が見いだされているが、それに対して本研究の因子分析結果においては、[感情への積極性]と[感情への気付き]の2つの因子が見出された。本研究の2因子それぞれの項目内容としては、[感情への積極性]では自分の感情に対する積極的な姿勢を捉える項目が集まっており、[感情への気付き]では、自分の気持ちに対する理解の程度を捉える項目が集まっている。

では、なぜこのような先行研究とは異なる因子構造となったのだろうか。大きな要因として考えられることは、先行研究の対象者が男性と女性であったことに対し、本研究では女性のみを対象者としたことが大きく関係していると思われる。中田（2007）の結果においては、第一因子の「感情に対する統制可能感」は男性の方が有意に得点は高く、また尺度全体得点においても、男性の方が女性よりも得点が高い傾向が見いだされている。このように、感情体験尺度では性差が見られ、また男性において得点の

高くなる尺度であることが明らかになっている。つまり、本研究結果において対象者は女性のみであり、男性結果が含まれず、女性の感情体験の形をとらえていることから、大きく異なる因子構造が見出されたと考えられる。

つまり、異なる因子構造が見出されたことは、先行研究の「感情に対する統制可能感」が、「感情をコントロールする」という視点ではなく、[感情への積極性]と[感情への気付き]の2因子がもたらす2つの視点から理解できることを示している。また、第二因子の[感情への気付き]は逆転項目が集まっており、わからない感情が存在すること、そしてその感情に対する気付きの程度により、感情体験が深まることを示している。

感情からの行動や表情への表出は、コントロールしているかもしれないが、それは感情自体をコントロールしているとはいえないのではないだろうか。しかし、感情自体はコントロールできなくとも、感情がどういったきっかけで、なぜ湧き上がってきたのかなど感情に対して論理的に考え、理解する・気付くことはできる。つまり、[感情への気付き]は深めることができ、そして、その[感情への気付き]が深まることにより、[感情への積極性]もさらに強まるのではないだろうか。先行研究とは異なる因子構造が示されたが、本研究の因子分析結果からは、感情体験における重要な2つの視点が明らかになったと考えられる。

2. 最も親しい友人と母親に対する関係性での共通項目の比較

最も親しい友人の<他者への信頼>と母親の<親近感>、最も親しい友人の<自己価値>と母親の<被受容感>における共通項目の平均値について比較したところ、最も親しい友人の方が有意に得点が高かった。

まず<他者への信頼>と<親近感>における共通項目において、最も親しい友人の方が得点が高くなったことについては、母親の持つ親子ならではの「近さ」とは異なる、「悩み事を打ち明けられる」、「心を許して話ができる」などの具体的な友人への姿勢、信頼の強さが特に強調された結果であると考えられ

る。恋愛関係や親子関係のことなど、母親だからこそ話せないことがあり、友人だからこそ話せることがあるのではないだろうか。最も親しい友人との関係性において、<自己価値>から<他者への信頼>が見出されていくように、「最も親しい友人」とされている人物はただの友人とは異なり、関係にある程度築けている存在であり、<他者への信頼>が強まりつつある関係であるため、得点が高くなったと思われる。全く何もないところから関係を築いてきたこと、信頼が強まりつつある関係性であるからこそ、関係性を捉える際にはポジティブな感情が含まれているのではないだろうか。

次に<自己価値>と<被受容感>における共通項目については、<他者への信頼>が高くなったことから、最も親しい友人とは<自己価値>を見出すことができている関係であると考えられ、そのために<自己価値>の得点が高くなったと思われる。具体的に共通項目に含まれる「役に立つ」「支えになってあげられる」などは、自分は親しい友人のために何かできる存在であるという、最も親しい友人との関係性において特に重要視される<自己価値>が見出される項目であると思われる。それに対して母親との関係においては、「役に立つ」「支えになってあげられる」という視点をもつことは難しいと考えられる。友人とは異なり、対等ではない母親との関係においては、自分が母親のために何かをする、役に立つという視点・感覚は得にくいのではないだろうか。そのために最も親しい友人との<自己価値>との比較においては得点が低くなったと考えられる。

3. 関係性と本来感と感情体験の相関

各尺度における相関を検討したところ、最も親しい友人との関係性における<他者への信頼>と<自己価値>は母親との<親近感>とは相関はほとんど見られなかったが、最も親しい友人の<自己価値>と母親の<被受容感>の間には相関が見られた。このことから、母親との関係性において「受け入れられる」体験をすること、「付き合う価値がある」と感じる、つまり自分の存在を肯定的に捉えることのできる体験は、友人関係において<自己価値>を見出すことと関連があると考えられる。

そして、〈自己価値〉と {本来感}・[感情への積極性]との間に相関が見られたことから、母親との〈被受容感〉とともに友人関係での〈自己価値〉が見出され、{本来感}・[感情体験]との関連も見出されると考えられる。つまり〈被受容感〉に関しては、母親との関係性が友人関係と関連があることが示唆された。

しかし、〈自己価値〉における {本来感}・[感情への積極性]との相関は、最も親しい友人との関係性を築くこと自体の影響も示している。最も親しい友人との関係性を築くことによって、自分の価値を見出したり存在意義の確認をしたりすることが、自分らしさへの理解であったり、感情に対する自分の姿勢に関連する。これはつまり、“最も親しい友人”という、母親との関係性とはまた別の関係性を築くことによって生じる関連であり、最も親しい友人との関係における体験が、大いに関連していることが示唆されている。最も親しい友人との関係性を築く上で、同じ視点を持つ人物と過ごすことによって、自分の感情を言葉にしたり、悩みと向き合ったりする機会が増え、「自分」を感じ、様々な自分の感情を感じる。この最も親しい友人という、母親とは異なる人物との関係性によって過ごされる時間、感情を“一緒に”感じる体験に、大きな意義があるのではないだろうか。

また、〈親近感〉と〈他者への信頼〉・〈自己価値〉で、ほとんど相関が見られなかったことから、母親との関係性が友人関係のすべてを左右するというのではないことが示唆されている。親しい友人に対する「信頼」や「悩み事を打ち明ける」という姿勢や、自分の存在意義の再確認においては、母親との信頼や悩み事を打ち明けるという関係性と関連は見られなかった。それはつまり、友人関係が自分で新しく築いていくことができる関係性であることを示しているのではないだろうか。母親に対しての血縁関係における“近さ”や信頼の程度とは関係なく、友人関係においては新しい関係を自分で築き、そこで自己価値を見出し、他者への信頼も深めていくことができる。母親関係とは異なる関係だからこそ、色々と試してみることができ、失敗や成功を体験できると考えられ、それまでにもてなかつた関係

性を新たに築くことができるのではないだろうか。母親との関係性に縛られない関係性を築く機会・可能性が、友人との関係性には含まれているのである。

まとめ

本研究では、女子大学生における友人関係の特徴を捉えるため、内的作業モデルを用いて、関係性尺度から最も親しい友人と母親のそれぞれに対する関係性について研究を行った。そして、最も親しい友人と母親に対する、それぞれの関係性は異なる視点から捉えられていることが明らかとなり、関係性において体験することや感じる気持ちの程度の違いが示唆された。また、異なる視点を持ちながらも、最も親しい友人との関係においてはよりポジティブに関係性を捉えていることが示され、友人との関係性を築くことの意義や可能性が示唆された。

本研究で見られた、最も親しい友人と母親のそれぞれに対する関係性尺度には、個人によっていくつかのパターンがあると考えられる。今後は、そのパターンに着目し、女子大学生の人間関係の特徴をさらに立体的に捉え、検討をしていく必要があると考えられる。

Ⅵ. 引用文献

- 福岡欣治 (1999). 友人関係におけるソーシャル・サポートの入手 - 提供の互惠性と感情状態-知覚されたサポートと実際のサポート授受の観点から- 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 13, 57-70.
- 福岡欣治 (2010). 他者依存性と家族および友人関係におけるソーシャル・サポート-大学生を対象として- 川崎医療福祉学会誌, 20, 259-265.
- 石本雄真 (2010). 青年期の居場所感が心理的適応, 学校適応に与える影響 発達心理学研究, 21 (3), 278-286.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005). 自分らしくある間隔 (本来感) と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74-85.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2006). 大学生の主体的な自己形成を支える自己感情の検討-本来感, 自尊感情ならびにその随伴性に注目して- 教育心理学研究, 54, 222-232.
- 金政祐司 (2007). 青年期の愛着スタイルと友人関係における適応性との関連 社会心理学研究, 22, 274-284.
- 金政祐司 (2009). 青年期の母-子ども関係と恋愛関係の共通性の検討: 青年期の二つの愛着関係における悲しき予言の自己成就 社会心理学研究, 25, 11-20.
- 榎本敦子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, 47, 180-190.
- 光元麻世・岡本祐子 (2010). 青年期における心理的居場所

- に関する研究-心理社会的発達の見点から- 広島大学心理学研究, 10, 229 - 243.
- 永井智 (2010). 大学生における援助要請意図-主要な要因間の関連から見た援助要請意図の規定因- 教育心理学研究, 58, 49-56.
- 中田 (北出) 薫 (2006). イラショナル・ビリーフと感情の体験様式との関連 - 感情体験尺度作成の試みを通してパーソナリティ研究, 14, 241-253.
- 中田 (北出) 薫 (2007). 感情体験尺度 (FES) の再検査信頼性の検討 (1) 静岡福祉大学紀要, 3, 25-29, 2007-01
- 則定百合子 (2008). 青年期における心理的居場所感の発達的变化 カウンセリング研究, 41, 64-72.
- 岡島泰三 (2008). 内的作業モデルの変化に関する研究の展望と今後の課題 臨床教育心理学研究, 34, 33-39.
- 岡本清孝・上地安昭 (1999). 第二の個体化の過程からみた親子関係および友人関係 教育心理学研究, 47, 248-258.
- 酒井厚 (2001). 青年期の愛着関係と就学前の母子関係-内的作業モデル尺度作成の試み 性格心理学研究, 9, 59-70.
- Shaver, P.R.&Hazan, C.(1988). A biased overview of the study of love. *Journal of Social and Personal Relationships*, 5, 473-501.
- 高木浩人 (2006). 大学生と自己開示と孤独感の関係-開示者の性別, 開示相手, 開示側面の検討- 愛知学院大学心身科学部紀要, 2, 53-59.
- 田中沙季 (2009). 内的作業モデルの不連続性について 金城学院大学大学院人間生活学研究科論集, 10, 68.
- 丹羽智美 (2002). 青年期における親への愛着が友人関係に及ぼす影響 - 環境移行期に着目して - 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達科学49, 328-329.
- 内田利広 (2014). 内的作業モデルの児童期から青年期における変容: 重要な他者という観点から 京都教育大学紀要, 125, 117-130.